

# 伝道師ゴッホ

中 川 憲 次

Van Gogh as a missionary

Kenji Nakagawa

## 序

1853年3月30日に南オランダのフロート・ズンデルト村に牧師の息子として生まれた後年の画家フィンセント・ファン・ゴッホは、主に弟のテオ宛の膨大な手紙を残している。ここでは、その手紙を手掛かりに、短期間ではあったが伝道師として生きたゴッホの日々に焦点を絞って、「ゴッホの説教と牧会学」を探ってみたい(註1)。そこから、当時のオランダの、ひいては現在の日本の神学教育の問題点も浮かび上がってくるであろう。

## 1 伝道師ゴッホ誕生までの経過

### 1.1 グービル商会時代

16歳のゴッホは、叔父の紹介でグービル商会に勤めを得た。そして、1875年22歳の時、パリ支店勤務になったゴッホの手紙には聖書や讃美歌からの引用が多く為されるようになる。例えば、1875年9月25日のテオ宛の手紙には次のようにある。「路は狭い。だからぼくらは気をつけなくてははいけない。(略) 祈れ、しかして働け。われわれの日々の仕事を果そう。手にふれた仕事は何でも全力をつくしてやろう。神がそのために神を求めるひとたちに対して善き贈りもの、奪い去られないであろう部分を与え給うことを信じようではないか。『人もしキリストにあらば新たに造られたるものなり、古きはすでに過ぎり、視よ新しくなりたり。』(コリント後書五・一七)」(註2)。彼のキリスト教信仰は激烈になっているといえよう。この信仰の熱心さは日増しに激しくなっている。同じ年の10月11日の手紙には次のようにある。「(略) きみも知っているように、ぼくはモンマルトルに住んでいる。同僚の若いイギリス人も同じ家で暮らしている。(略) かれは全く純真な、けがれのない心の持ち主で仕事は大いに熱心だ。毎日夕方、ぼくらはいっしょに帰宅して、ぼくの部屋で何か食事をする。そのあとは、ぼくは声を出してたいがい聖書を読む。ぼくらは道すがらずっと聖書を読もうと思っている。(略)」(註3)。このような人間が早晚伝道者を志すことは当然の成り行きだったのかもしれない。

### 1.2 イギリスの寄宿舎学校の教師に

ゴッホは1876年の4月にはグービル商会を辞めることになる。1876年1月10日のテオへの手紙で、ゴッホ曰く、「二人が会ってからまだきみに便りをしていない。その間に、全く思いもかけなかったことが僕の身に起きたのだ。帰ってきて、ブッソ氏に会ったとき、ぼくは今年も店に勤めさせてもらえるかと尋ねた。そして、自分としてはあなたがぼくにあまり重大な不満は持っていないことと思うと言った。このあとの言葉が実際、問題になったのだ。そして結局は、ぼくがかれの店でいろいろと学んだことをこの紳士たちに感謝しながら、四月一日にこの店を辞めてもらいたいとかれは言うのだ」(註4)。

ゴッホは次の仕事を見つけねばならなくなったが、その就職活動の日々に書いたテオへの手紙には、聖職者へのあこがれがうかがえる。1876年2月19日のテオ宛の手紙でゴッホ曰く、「(略) ぼくはちょうどエリオットの実に立派な本、『牧師館物語』を読んだばかりだ。三つの物語からなっているが、特に最後の話『ジャネットの悔み』には心を打たれた。これは主に貧民街の住民の中で暮らした牧師の話だ。かれの書斎はキャベツの茎などがちらばっている庭や、貧乏人長屋の赤い屋根や、煙を吐く煙突などを見下ろす場所にあった。かれの食事はふつうなま焼の羊肉や水っぽい馬鈴薯のほかになにもなかった。かれは三十四の年で死んだ。(略) かれの埋葬のとき、ひとびとは『われは復活なり、生命なり。われを信ずるものは、たとえ死ぬとも、生きん』と述べられてある章を読んだ。(略)」(註5)。

以下で扱うベルギーのポリナージュでの全身全霊を挙げて貧しい炭坑夫たちに仕えた伝道師ゴッホの念頭には、この『牧師館物語』の「貧民街の住民の中で暮らした牧師」の姿があったに違いない。ゴッホは『牧師館物語』に登場する「貧民街の牧師」のようにしたのである。

### 1.3 ポリナージュへ

グービル商会を辞めた後、ゴッホは1876年4月17日からイギリスの寄宿舎学校などで十歳から十四歳までの少年、合わせて20数人に、フランス語の初歩や算術などを教える職につく。しかし8か月で体調を崩して年末には

帰郷している。年が明けた1877年1月21日からゴッホはある書店に勤めるが、やがて3か月で辞めて正式の牧師になるべく神学大学を目指すも、受験勉強に挫折する。1878年7月22日付のテオ宛の手紙でゴッホ曰く、「(略)お父さんが手紙に書いたことと思うが、先週ぼくらはブリュッセルに行って来た。(略)オランダよりもあちらの方がたしかに修業課程が短いし、費用も少なくてすむ。だから、何か見つかるまで、ベルギーを念頭に置いて探し回るべきだろう。ぼくらはフランドル教習所を見学した。きみも知っているように、オランダでは少なくとも六年以上勉強しなければならないのに、ここは三年課程なのだ。それに必ずしも全過程を修了しなくても、その前に伝道師の地位を手に入れようと思えば、できないことはないのだ。必要とされているのは人びとに心のこもった、平俗な説教を自在に語れる才能なのだ。長い、学識のある説教よりも短くても力のこもったものの方がいいのだ。だから古典語の知識や神学研究はあまり多くを要求されない(それらの知識があれば推薦のときに有利ではあるけれども)で、実際の仕事に対するすぐれた適性と真心からの信仰が重く見られるわけだ」(註6)。このとき、ゴッホの父は、ゴッホを何とかして伝道師にしてやりたかったのであろう。だからゴッホを伴って「フランドル教習所を見学」したのであろう。しかし、その教習所で3か月学んだけれどもゴッホには伝道師の資格は与えられなかった。それで、ゴッホは資格のないまま伝道師の業を為そうとするのである。その計画を決行する前にゴッホは書いている。1878年11月15日付のテオ宛の手紙で、ゴッホ曰く、「(略)ぼくはイギリスにいたころ、炭坑夫たちの間で福音を説く伝道師の地位を求めたことがあったが、せめて二十五歳になっていなければだめだというので断られてしまった。(略)経験によれば、暗黒のなかを歩くひとびと、たとえば炭坑の坑夫たちのように地球の中心で働く人たちこそ福音書の言葉に強く感動し、また、それを信ずるのだ。ところで、ベルギーの南部、ヘノー県のモンズ付近、フランス国境に接した——いや国境を越えてまたがってさえいるが——辺にポリナージュと呼ばれている地域がある。そこには無数の炭坑で働く労働者からなる独特の住民が住んでいる。(略)ぼくは伝道師としてそこへ行きたい気持ちでいっぱいだ。(略)」(註7)。

こうしてゴッホは「ベルギーの南部、ヘノー県のモンズ付近、フランス国境に接した」ポリナージュに行き、貧しい坑夫たちに仕える。

## 2 ゴッホの説教

ゴッホは上に引いた1878年7月23日付の手紙において、伝道師には「人びとに心のこもった、平俗な説教を自在に語れる才能」が必要であり、「長い、学識のある説教よりも短くても力のこもったものの方がいいのだ」

と書いていた。ここにゴッホの説教の要点が示されている。ゴッホにとって説教は「心のこもった平俗な」ものであり、また「力のこもった」ものでなければならなかったのである。

まず、ゴッホが他の牧師たちの説教について語っている言葉を聞いてみたい。1877年8月5日のテオ宛の手紙には、『創造』の詩人であり、多くのすぐれた本の著者であるテレ・カーテ師がロマ書一章一五節——一七節について説教した」とした上で、次のようにその説教について記される。「教会にはいっばいのひとが集まっていた。多くの顔には、男にも、女にも信仰の表情がしるされていたが、その表情は性格によってさまざまに違っていた。(略)かれの話は見事で、全身全霊をもって語っていた。説教は短くなかったのだが、思いのほか早く礼拝式がすんでしまった。かれの話に引き込まれて時のたつのを忘れてしまったのだ」(註8)。

ゴッホによれば説教とは「全身全霊をもって語」られるべきものであり、「時のたつのを忘れ」させるべきものであったのである。

次に、神学大学を目指して受験勉強中だった1877年10月30日付テオ宛の手紙でゴッホ曰く、「(略)テオよ、(略)もし、いろいろな困難を克服できるとすれば、それは一意専心努力したたまものであり、神に祈ったおかげと言うべきだろう。ぼくは必要な知恵を授け給えと熱心にたびたび神にお祈りしたからだ。説教の原稿を書き、たくさん説教をすることができるよう。それがいいよ立派なものになってお父さんの説教に近いものとなり、毎日いくらかずつ改善して生涯の仕事を完成することができるよう。(略)」(註9)。

ゴッホが牧師である父親をこの時期には尊敬していたことがよく分かるが、それはともかく、ゴッホにとって説教の「原稿」をきちんと準備することは、自明のことだったのである。

では実際には、ゴッホの説教はどんなものだったのだろうか。イギリスの寄宿学校教師時代の1876年10月29日にゴッホが行った説教の全文原稿が残されている。この説教を語った時の気持ちについて1876年10月31日付のテオ宛の手紙でゴッホ曰く、「(略)テオ、きみの兄は先週の日曜日、『この場所にわれ平安を与えん』と書かれている神の住家で、はじめて説教したのだ。ぼくが話した内容の写しを同封しておこう。これを最初としてたくさん続けてゆきたいものだ。(略)説教壇に立ったとき、ぼくは自分を、地下の暗い洞穴から出てきて、ふたたびなつかしい日の光に接した人間でもあるかのように感じた。これからぼくはどこへ行っても福音を説くのだと思うとうれしい。その仕事を立派に果たすためには、自分の心の中に福音を持たねばならぬ。主よ、われに与えたまえ。テオ、きみは人生を良く知っているから、わかるだろう。貧しい説教者は世のなかでむしろ孤独の前に立たされる。だが、主はわれわれのなかにますます『…

されど、われひとりいるにあらず、父われとともに在すなり』の信仰を呼び覚ましてくれるのだ」(註10)。

ここでは、「(説教という) 仕事を立派に果たすためには、自分の心の中に福音を持たねばならぬ」という、当たり前だが、その実そうになっていないことが多い故にこそ、心されねばならないことが、今更ながらに語られている。そして、同時に説教者の孤独について「貧しい説教者は世のなかでむしろ孤独の前に立たされる」とした上で、それ故にこそ、神の同伴が語られていた。

さて、その日ゴッホが語った説教を見てみよう(註11)。

「詩編一一九・一九、われこの世の旅人なり、汝の戒律をわれにかくすことなかれ。われわれの生活が天路歷程であること、——つまり、われわれはこの世の旅人である、しかし、そうであるけれども、われらの父がわれらと共にいますがゆえにわれわれはひとりではないということ、これは古き信仰であります。これは善き信仰であります。われわれは巡礼であります。われわれの人生は地上から天国への長い徒歩の旅なのであります。(略) よき闘いを果したひとが死ぬ時には言いようのない歓びがあります。(略) イエス・キリストを信ずる人々にとって、希望——落胆ではありません——のまじってない死も悲しみもありません。そこには絶えず生まれ変わることに、絶えず闇から光へ行くことだけがあるのです。(略) われわれの人生は天路歷程であります。わたしはかつて、非常に美しい絵を見ました。夕暮れの風景でした。右手遠くには丘の列が夕もやの中に青く現れていました。これらの丘の上には日没の輝きと雲があり、雲の後ろは銀色に、金色に、深紅色に輝いていました。(略) 風景のなかを一すじの道が遠く高い山まで続いているのです。遠いその山頂には街があって、沈みつつある太陽がその上に壮麗な光を投げかけています。道の上には巡礼が杖を手にしてあるいています。すでにかれはずいぶん長い間歩き通してきたので、すっかり疲れています。そしていま、かれは女の人——というより黒衣のひとに会ったのです。このひとはあのパウロの言葉、『悲しみに蔽われていながら、しかもつねに歓びあふれる』ものを思わせるところがあるのです。神の天使が巡礼を元気づけ、かれらの問いに答えるためにそこに遣わされたといった感じなのです。そして巡礼は彼女に尋ねます。『この道は山の上までずっと続いているのですか』そして、答えがあります。『そうです、最後の果まで。』かれはまた尋ねます。『して、この旅はまる一日かかるのですか』また答えます。『明け方から夜中まで。わが友よ。』そして巡礼は悲しみに蔽われながら、しかもつねに歓びにあふれつつ上り続けるのです。——悲しみに蔽われたとはあまりに遠く、道はあまりにも長いからです。はるかに遠く、夕映えのなかに壮麗に輝く永遠の街を仰ぎみてかれは希望に満ち、そして遠い昔に聞いた二つの古い文句を思い出すのです。その一つは、〈多くの闘いが闘われ

ねばならぬ / 多くの苦しみが苦しまれねばならぬ / 多くの祈りが祈られねばならぬ / そしてはじめて、終わりは平和であるだろう〉 もう一つは〈水はくちびるのところまでやってくる / だが、それより高くは上ってこない。〉(略)」

まず、この説教には、ゴッホが愛読していたジョン・バニヤンの『天路歷程』の影響が顕著である。その上で、この説教の通奏低音は、「悲しみに蔽われながら、しかもつねに歓びにあふれつつ」というフレーズであろう。「われこの世の旅人なり、汝の戒律をわれにかくすことなかれ」という詩編の言葉を受け止めつつ、ゴッホは人生の旅路において常に我々を苦難が襲うことを前提にこの説教を進めている。そして、その苦しみや悲しみを、ゴッホは人間にとってむしろ幸いなものと受け止めているようである。ゴッホは引用していないが、私にはルカによる福音書6章20節、21節のイエス・キリストの言葉がこのゴッホの姿勢によく響き合うと思われる。こうである。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」。

このゴッホの説教のトーンに似た説教がマルティン・ルターの「顕現節第四主日の説教」と題された説教にある。マタイによる福音書8章27節の「いったいこの方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」という言葉をテキストにしたその説教において、ルターは次のように語っている。「この福音において、海はこの世、すなわち、動揺し、定まりなく、変転きわまりない現世を象徴していることはたしかである。嵐と風とは、やみの世の主権者、天上にいる悪の霊、である。舟は教会、また、まことの信仰をもつ私たちすべてである。実に、信仰とは、キリストがおいでになる舟である。この舟はたえず危険にさらされ、翻弄されている。私たちは、いつも危険の中で振りまわされることを必要とするのである。だから、自分の危険を感じとるものは幸いであり、何も感じとることのないものは不幸である。私たちは、試練をさけるために、自分を安全におこうとする。(略) このようなものに、災いあれ(註12)。

ゴッホは、ルターの言う「(現世における) 危険」の必要性を認識していたのである。

また、ゴッホの件の説教の構成には、「平俗な説教」を意識した面が見られる。それは、後半の「わたしはかつて、非常に美しい絵を見ました。夕暮れの風景でした。右手遠くには丘の列が夕もやの中に青く現れていました。これらの丘の上には日没の輝きと雲があり、雲の後ろは銀色に、金色に、深紅色に輝いていました」という部分である。自分の愛好している、具体的な「一枚の絵」をきっかけにして会衆の興味を喚起し、この説教でゴッホが伝えたかった、パウロの言う「悲しみに蔽われていながら、しかもつねに歓びあふれる」という信仰へ

と会衆を導こうとしたのである。未熟ながらも、ゴッホは己が説教をここで実践していると言えよう。

ただゴッホの説教には、問題もあった。先に引いたように、ゴッホの説教においては「説教の『原稿』をきちんと準備することは、自明のこと」だったわけで、今しがたの説教もその実践である。この「原稿を書く」ことに対して、否定的な証言が残されている。それは、1921年4月12日付のある新聞に載った、ブリュッセル出のPr.G.とサインのある文集雑録のなかにあった「フィンセント・ファン・ゴッホとボクマ先生」と題する文章に出てくるものだという。曰く、「礼拝で話すとき、かれ（ゴッホ）はよく前もって原稿に書いてきた長い講話を読み上げるのだった。——こうしたやり方はフランドルの土地ではあまり評判が良くなかったのである」（註13）。説教原稿を前もって用意することは、必要であろう。しかし、ゴッホの説教におけるその信念は、ルターの『卓上語録』の中にある次の言葉で補われる必要があったであろう。『卓上語録』の「よい説教者」と題された文章において、ルター曰く、「よい説教者は、次のような徳の持ち主でなければならない。（略）第五に、記憶のよいこと」（註14）。説教原稿を前もって準備することは必要である。しかし、それを見ながら読み上げてはならないのである。説教原稿は書きあげた上で、それを記憶して、説教壇においては空で語らねばならないのである。説教は会衆の顔を見ながら、語りかけるべきものだろうからである。

さらに、ゴッホの説教においては、神学大学教育によって養われるような神学は無用とされていた。この点については、ゴッホがアムステルダムの神学大学入試準備のために教えてもらっていたM・B・メンデス・ダ・コスタ博士の次のような証言がある。「まもなくギリシャ語の動詞が彼の手に負えなくなってしまった。わたくしはなんとかして勉強を活気づけようとして工夫したのだったが、むだだった。かれは言うのだった、『メンデス、——われわれはお互いに【さん】づけで呼ばなかった。——ぼくのように、貧しいひとたちに平和を与え、かれらがこの世の生活に安らぎをうるようにする仕事にたずさわりたいと思っている人間にとって、こんな恐ろしい勉強が必要だとあなたは本気で信じていますか』。もちろんわたしはかれの教師として同意することはできなかった。しかし、心の底ではかれ——断っておくが、わたしが言っているのは、かれ、フィンセント・ファン・ゴッホのことである——の言うことがまことに正しいと思っていた」（註15）。M・B・メンデス・ダ・コスタ博士は、「（ゴッホの）言うことがまことに正しいと思っていた」らしいが、オランダの教会世界はそれを認めなかった。説教をするには、神学大学教育によって語学や神学を修めることが条件だったのである。この点において、ゴッホの説教は当時のオランダの教会世界で否定されたのである。事情は、現代日本の教会世界で

もあまり変わらないようである。たとえば、一般社団法人日本私立大学連盟が発行している『大学時報』第371号（2016年11月号）に、土井健司氏（関西学院大学神学部長）の「開かれた神学教育を目指して」と題された論文が載っているが、その「神学部の教育課程」と題された項で次のように述べられている。「神学という学問は、『知解を求める信』という古代キリスト教の伝統にさかのぼる。その意味で、神学は根本においてイエス・キリストの福音宣教、それゆえ教会へと方向づけられているが、その関係は決して単純なものではない。学問としての神学は、素朴に信仰を表明するだけではすまないからである。旧新約聖書の研究、キリスト教史の研究、教義・教理の体系化、礼拝などの儀礼の実践方法など、諸分野にわたって神学は営まれる。歴史学、社会科学、文芸批評などの方法論を用いて実証的、理論的な研究が深められ、教育にフィードバックされる（略）」この神学部長の前に出れば、ゴッホの説教は否定されるであろう。すなわち現代日本最大のプロテスタントの教団である日本基督教団の認可神学校の一つである関西学院大学神学部もまたゴッホに伝道師としての資格を与えることを拒否するであろう。

### 3 ゴッホの牧会学

ゴッホの伝道師像は、上に引いた1876年2月9日付のテオへの手紙にあった、「貧民街で暮らした牧師」の像であったろう。その上で、ゴッホが伝道師の働きの実践にあたって是非とも必要であると考えていたことが何であるかは、1879年4月付のテオ宛の手紙にある次の言葉からうかがうことができる。ゴッホ曰く、「（略）この人たちはまことに無学文盲（＝まま）で、大半は字が読めない。だが、同時にかれらは自分たちの難しい仕事にかけては物わかりがよくて、機敏だ。また、勇敢で、率直で、背は低い、がっちり張った肩をしていて、暗い、くぼんだ眼をしている。かれらはいろいろのことに器用で、恐ろしく勤勉に働く。かれらは神経質なところがある。弱弱しいという意味ではない。非常に感じ易いということだ。かれらは抑圧的な人間に対しては生れつき根深い憎悪と強い不信の気持ちを持っている。坑夫といっしょにいるものは坑夫の性格と気質を持たねばだめだ。もったいぶった高慢や思い上がりは厳禁だ。でないと、けっしてかれらといっしょにやっつけくことも、かれらの信頼をうることもできない」（註16）。伝道師や牧師が仕える相手の信頼を是非とも勝ち取らねばならないということを、ゴッホは知っていたのである。これ以上の牧会学があるであろうか。

また、ゴッホは牧会する者にとって何よりも必要なのは、献身であるということを知っていた。ゴッホの献身がいかなるものであったかについては、次のような証言がある。ルイ・ピエラール著『フィンセント・ファ

ン・ゴッホの悲劇的生涯』に曰く、「(略) そうだ、ファン・ゴッホは1878年12月からここ、モンス在の炭坑地ポリナージュに住んだのだ。(略) いろいろたずねた挙句、わたくしはついにトゥルーネジ地区である年寄の牧師を見つけだした。(略) 以下はかれがわたくしに送って下さった覚え書である。『(略) このわれわれの若者はプチ＝ヴァムにある農家に下宿していました。この家は比較的美丽でした。近所にはそのころ坑夫たちの小屋しか見当らなかったのですが、それらに比べてこの家は一きわ目立って見えました。(略) しかし、われわれの伝道師はまもなく自分の住居についてかれ独特の感情をさらけ出しました。自分の住居がぜいたく過ぎると感じたのです。それがかれのキリスト教的な謙虚の感情を打ったのです。かれには坑夫たちとまるで違った部屋でぬくぬくと暮らしてゆくことがたえられなかったのです。そこで、かれはいろいろとかれに思いやりをかけてくれたこの家の人たちのもとを去り、小さな小屋に入って住んだのです。そこではかれは一人ぼっちでした。家具調度は一切なく、炉の隅でうずくまって寝ていたという話でした。(略) ひとびとはかれが古ぼけた軍隊服を着て、みずばらしい帽子をかぶって出てくるのを見かけました。(略) どうしてこの若者はこんな風になってしまったのでしょうか。訪問するたびにぶつかる悲惨な状態を目の前にしたかれは同情にかられてほとんどすべての服を与えてしまったのです。かれの金も同じように貧しい人たちの手に渡ってしまい、かれはいわば何一つ自分のものとしてとって置かなかったのです。(略) かれは絶対的なやり方でイエス・キリストの言葉に従おうとしたのです。かれは初期のキリスト者たちにならって、生きてゆくのにならざるにぎりぎり必要なもの以外はすべて人に捧げてしまわねばならぬと感じたのです。(略)』(註17)。このような証言を聞くと、独住修道士の祖、聖アントニオスのことが思い出される。アタナシウスの聖アントニオス伝には次のように記されている。「(アントニオスは) 両親の死後、まだ年端もいかぬ妹のほかはたった一人になってしまった。それは彼が一八か二〇歳のときのことで、彼は家と妹の面倒を見ることになった。彼が二〇歳になったころ両親が死に、彼のもとには幼い妹が残された。両親の死後、半年も経たぬときのこと、かれはいつものように主の家に行く道すがら、精神を集中して、いろいろ思いをめぐらしていた。どのようにして使徒たちは家を捨て、主に従ったのだろうか。どのようにして『使徒言行録』の中の人々は自分の持ち物を売り払い、その代価を貧しい人々に分け与えるために持ち寄ったのだろうか。彼らのために天に備えられた希望はいかに大きく素晴らしいものだったことかと。このようなことを思いめぐらしつつ主の家に入ると、ちょうど福音が朗読されるところだった。そこで、主が金持ちの若者に、「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。それから、わたしに従いなさい。そうす

れば、天に富を積むことになる」(マタイによる福音書19章21節)と言われるのを耳にした。アントニオスには、まさに道すがら思いをめぐらしていた使徒たちへの追慕が主に鼓舞されたものであると思われ、またその朗読が自分のために読まれたものと確信して、そのままただちに主の家を後にすると、自分も妹も持ち物に煩わされることのないよう、持ち物——両親から三〇〇アルーラ(約八〇ヘクタール)の最上の肥沃な土地を受け継いでいた——を町の人々に与えてしまった。残りの動産もすべて売り払うと、多額の金額になったので、それも貧しい人々に施してしまった。ただ妹のために、ごくわずかな金銭を残しておいた。再び主の家に入ると、福音の中で、『明日のことまで思い悩むな』(マタイによる福音書6章34節)と主が言われるのを耳にした。アントニオスはただちにそこを去ると、残っていた金銭をも貧しい人々に与えてしまった」。(註18)。

このアントニオスの献身についての記述を、上に引いたゴッホの献身の様子は彷彿とさせる。いや、ひょっとすると、ゴッホはこの『アントニオス伝』を読んでいて、それを真似たのかもしれない。それはともかく、ゴッホは、このような献身こそ伝道者、そして説教者に不可欠なものと考えていたのであろう。

その点、ゴッホ当時の教会世界を支配していた牧師たちの牧教会学は、ゴッホのような牧教会学ではなかったらしい。我が国のゴッホ研究の第一人者である國府寺司氏はその著書『ファン・ゴッホ 自然と宗教の闘争』において、「ドミノクラシー」という言葉を紹介しておられる(註19 22頁-27頁)。この言葉はオランダの美術史家ヘラルド・プロム氏の造語で、「文学における牧師支配の状況」を指しているという。それは、「(当時のオランダの) 聖職者たちはまぎれもなく当時のオランダにおける文化的指導者であった。彼らはキリスト教のみならず、芸術から自然科学にまでわたる広範なテーマについて講演をし、文学、芸術関係の雑誌の編集にも携わっていたのである」(註20 同上)ということらしい。もしそうなら、なんとという気楽な牧師稼業であろうか。たぶんそうだったのであろう。彼らは、ふさわしい学識を身につけた上で、牧師資格を獲得し、それなりの牧師館に住んで、それなりの俸給を得て、「ドミノクラシー」的な日々を生きていたのであろう。だからこそ彼らは、マタイによる福音書19章21節の青年に対するイエスの言葉に従った聖アントニオスよろしく、自分の持ち物を全て打ち捨ててポリナージュの炭坑の貧しい人々にその身を捧げたゴッホを、「聖職者らしくない」者として、教会世界から放逐したのであろう。

## 結び

ポリナージュの炭坑における伝道師としての活動を教会当局から認められず、ついに正式の伝道師になれな

かったゴッホの手紙からは、その後、神についての言葉や、聖書の言葉は消える。伝道師ゴッホは、画家ゴッホへの道をたどるのである。伝道師ゴッホは挫折したのである。しかしここで述べ来たゴッホの説教学や牧会学は、今なお燦然と輝いていると、私は敢えて言いたい。後年、絵に命を懸けたゴッホは、あの時、福音説教に命を懸けていたのである。この、福音宣教に命を懸けるということこそ、伝道者にとって不可欠の要素である。上に引いた現代日本の神学部長は「神学は根本においてイエス・キリストの福音宣教、それゆえ教会へと方向づけられているが、その関係は決して単純なものではない。学問としての神学は、素朴に信仰を表明するだけではすまないからである」と言っていたが、神学という学問に携わる者は、まずゴッホのような命懸けの福音宣教に生きることの尊さを心の奥深く銘記すべきであろう。それができていれば、「素朴に信仰を表明するだけ」というような、「素朴な信仰」を侮る言葉は出てこなかろう。それより何より、「信仰」に「素朴な信仰」とか「素朴でない信仰」とかいう区別があろうはずもない。「信仰」は「信仰」である。あるか、ないか、それだけである。もしも、現代日本の神学の世界が、そのような「素朴な信仰」幻想に毒されて学術的になっているとするなら、今こそ、伝道師ゴッホの、まずは「説教学」と「牧会学」に耳を貸すべきではないだろうか。

## 註

- 1 ゴッホの手紙の引用は以下の書物によった。フィンセント・ファン・ゴッホ著、二見史郎他訳『ファン・ゴッホ書簡全集 一巻』、みすず書房、1969年
- 2 上掲書 103頁－104頁
- 3 同書 107頁－108頁
- 4 同書 113頁
- 5 同書 116頁
- 6 同書 255頁
- 7 同書 259頁
- 8 同書 210頁
- 9 同書 225頁
- 10 同書 144頁
- 11 同書 158頁－161頁
- 12 マルティン・ルター著、岸千年編訳、『ルターの説教』、聖文舎、1977年、所収
- 13 同書 263頁
- 14 マルティン・ルター著、植田兼義訳『卓上語録』、教文館、2003年、所収
- 15 同書 250頁
- 16 同書 270頁－271頁
- 17 同書 312頁－314頁
- 18 『中世思想原典集成 I 初期ギリシャ教父』、平凡社 1995年、776頁、777頁＝原文は Vita di Antonio. Introduzione di Christine Mohrmann, Testo critico e commento a cura di G. J. M. Bartekink, Traduzione di Pietro Citati e Salvatore Lilla, Milano 1974
- 19 國府寺司著『ファンゴッホ 自然と宗教の闘争』小学館、2009年、22頁－27頁
- 20 同上